

有識者・団体等ヒアリング結果報告書

平成21年10月

仙台市企画市民局

目 次

第1	ヒアリングの概要	1
1	目的	1
2	対象者	1
3	実施期間	1
第2	意見・提言の概要	2
I	やさしさと健やかさに満ちた市民のまちをめざして	2
1	すべての市民が、障害の有無、年齢、性別、国籍などにかかわらず、自立し、ともに生き、自己実現ができる環境づくり	2
2	21世紀の仙台の土台となるいきいきとした地域社会の形成	3
3	すべての市民が、安全に安心して暮らすことができる都市づくり	4
II	地球環境時代を先導する悠久の杜の都をめざして	6
1	杜の都の風土を未来に継承し、自然と共生する都市づくり	6
2	環境への負荷の少ない循環型都市づくり	7
III	地球的交流の要となる新しい中枢都市をめざして	8
1	仙台と東北の自立的な発展を支える高次な都市機能の集積	8
2	世界に開かれ、国際社会に貢献する都市づくり	9
3	都市の活力と生活の豊かさを支える産業の振興の形成	9
4	高次な都市機能が連携する都市構造の形成と計画的な市街地整備の推進	11
5	多様な都市活動を支える総合交通体系の形成	12
IV	未来を創造する世界の学都をめざして	12
1	高度な研究機能や情報機能の集積による、未来を創造する知識情報社会の形成	12
2	創造力と心の豊かさをはぐくみ、自己実現ができる生涯学習社会の形成	13
3	世界性を持つ都市の個性をはぐくむ豊かな都市文化の創造	14
V	都市経営	15
1	主体的・創造的な都市経営の推進	15
2	市民と行政の協働によるまちづくりの推進	15
3	効率的な行財政運営の推進	16

第1 ヒアリングの概要

1 目的

新総合計画の策定に向け、市民生活に関わる分野の研究・実際の活動に携わってきた学識者・実践者から、市政運営上の課題の抽出や今後の方向性についての意見をいただくことを目的として実施した。

2 対象者

現基本計画「仙台21プラン」の施策体系の中分類の分野についての学識者や実践者（計82人）に対して行った。

◇学識者：市民生活に関わる分野の研究・検討あるいは実際の活動に携わっている研究者

◇実践者：それぞれの分野で市民等を対象に実務に携わり、経験に裏打ちされた有益な意見を頂けると思われる方

3 実施期間

平成20年10月～平成21年4月

第2 意見・提言の概要

I やさしさと健やかさに満ちた市民のまちをめざして

1 すべての市民が、障害の有無、年齢、性別、国籍などにかかわらず、自立し、ともに生き、自己実現ができる環境づくり

〈弱者支援、セーフティネット〉

- ・社会的に立場が弱い人への施策を手厚くしてほしい。本人の責めによらない格差の固定化を防ぐべき。
- ・自助努力ができない人をサポートしていくには人の助けしかない。人を支える使命感と喜びを感じてもらえることも必要。
- ・生活困窮など深刻化する前の相談機能やソーシャルスキルトレーニングなどの充実を。

〈健康づくり〉

- ・たばこ、肥満、運動不足のどれかを解消するだけで健康づくりにだいぶ好影響がある。禁煙空間の拡大や運動をサポートする情報提供や環境整備に取り組むべき。
- ・心の健康は体の健康、社会の安全安心にもつながる。相談機関の充実のほか、市民に問題提起し、働きかけを行うなど、早期の積極的な取組も必要。

〈医療・福祉〉

- ・病院同士の連携、開業医の連携に課題がある。市立病院の移転を機に、医師が持つ奉仕の精神や専門性を生かした地域の開業医との連携のモデル事業を行えないか。
- ・公助から、自助、互助、地域全体での支え合いに導くためには、共通の利害で結びつくシニアのネットワークの活用や、モデル地域での実践・先導、地域福祉のリーダーづくりが有効。障害者、高齢者などさまざまな支援を必要とする人たちを総合的に地域で支えていく体制構築が求められる。

〈高齢者〉

- ・高齢者は少子化の中で労働力として重視されるべき。自立した個人として地域の中で自発的に活動に取り組む機会を提供していくことも必要。
- ・生活保護者や身寄りがない人への施設サービスの不備、施設が足りないための待機、在宅介護の家族や本人の負担の大きさという問題があり、施設系サービスの充実が必要。

〈障害者〉

- ・障害者に対応した施設整備は充実したが完全にはならず、その部分をフォローするのは人の力を育てる福祉教育。子供に知ってもらうことは重要なので学校との連携が重要。

- ・ 障害者がもっと地域社会に出て行くことが望ましい。まちづくりへの参画、雇用の場の拡大、学校、老人会、町内会の集まりなどに出向いての交流を進めるべき。
- ・ 市民との協働が重要であり、障害者への直接的な支援については民間に委ね、行政はより専門性の高い相談機能の提供といった役割を重視すべき。問題を多角的に捉えていくために地域の様々な支援者とネットワークを組んでいくことも重要。
- ・ 障害者の自立の阻害要因として、グループホームの不足や偏在、バリアフリーの借家物件が非常に少ないことが挙げられる。

〈子育て〉

- ・ 遊具の撤去など子供の遊ぶ環境が社会的に過保護な状況になっている。子供達に正しい遊び方を伝えられる人や環境、雰囲気づくりが必要。
- ・ 子育てサービスの増大により、親が自ら行動して子育てを学ぶことがなくなった。次の世代の親に子育ての継承ができなくなるおそれがある。
- ・ 子育て支援制度を振り返り、実際にどう効果があったかの検証が必要。子育てに関する分野だけでなく、社会全体でどうかかわっているかを三次元でとらえて評価すべき。
- ・ 隣接する自治体などと子育て行政に関して協力し合う態勢をつくってほしい。
- ・ 0～3歳未満児の親に対するケアが不足している。最近では子供へのしつけを知らない親もいるくらいなので、細かいことでも親自身に教えることが必要。
- ・ 保育の問題などで、働くことをあきらめる人もいる。いろいろな活動を、子供ができることによってあきらめることをつくりたくないようにしたい。
- ・ 急に保育が必要なときの緊急サポートは、公立保育所では難しいが、民間ならできる。民間にノウハウも能力もあるのだから、うまく使ってほしい。行政にはバックアップの役割を果たしてほしい。

〈男女共同参画〉

- ・ 高齢者は少子化の中で労働力として重視されるべき。特に女性については今まで以上に家事と育児を安心して任せられる環境が重要となる。
- ・ DV（ドメスティック・バイオレンス）については男性への教育が重要だが、男女共同参画の問題というよりは、人権問題として訴えた方がよい。

2 21世紀の仙台の土台となるいきいきとした地域社会の形成

〈市民活動、地域コミュニティ〉

- ・ ボランティア育成体制が充実したが、ボランティアセンター、地域活動サポート

センター、市民センターなどの機関の役割が市民に分かりにくいところがあるので役割整理が必要。

- ・制度の隙間など行政の手の届かないところはどうしてもあり、ボランティアの活用は一つの有効な手段だと思うが、無償という考え方は捨てた方がよい。活動の経費や続けていくための費用は必要。少しの支援で志ある人が活動できる環境をつくってあげることで、ボランティアの活動が広がる。
- ・企画の立て方しだいで、ボランティアの力を良い方向に伸ばしていける。助成を出すだけでなく評価などのフォローもしっかりしてもらえるとよい。
- ・地域の力を高めるには、リーダーの育成、具体的な在り方のイメージを示すこと、共感してもらえようメディアで訴えること、コミュニティ・センターに地域の各団体の活動・交流拠点機能を持たせることなどが重要。
- ・地域の多様なニーズに応えるためには市民活動の多様化、活性化が必要。地域社会の中で努力している民生委員や町内会のネットワークの中にNPOや市民活動を含めてより充実できるとよい。多様な人との交流から目に見えない社会の資本（ソーシャル・キャピタル）が生まれるので、多様な活動主体それぞれへの支援のほか、それぞれをつなぐ支援も重要。
- ・事務作業的なところは行政がフォローし、実際に体を動かす部分はNPOが行っていくといった役割分担ができるとよい。
- ・ハード面では総じて一定の水準に達しており、これからは福祉、文化、高齢者対策といったソフト面を重視すべき。そのためにはボランティアやNPOの活用が大事。
- ・行政が100パーセントではなく、足りないところをNPOなどが補って、全体としてできればよい。行政が金を出しているから上に立つという考えではなく、対等な関係になり相互が補完し合いながら進めるべき。
- ・行政は、無理にNPOを育成するのではなく、既存のノウハウを活用しようという考え方で、Win-Winの関係を目指せばよい。そのためには、どこに、どのようなノウハウがあるかを知ることが重要。あるテーマに対して、いろいろなNPOの力を集められるようになればよい。このようなコラボレーションを実現するためにはコーディネーターが必要。
- ・将来の仙台を担う次世代の育成のための策をもっととっていくべき。小学生などのうちから、まちづくりやパブリックに関心を持ち自発的に参加する市民性を育むことが重要。子供の視点や力を生かすことが重要。
- ・学生ボランティアを生かすことが重要だが、課題として、学生のボランティア活動に対する企業の評価が低いことがある。企業も意識を変えることが必要。

- ・「まち」について知らない市民が大多数。住民が気づき、動く方向になるように情報を出すこと、理解を促すことが重要。行政は、縦割りの情報をそれぞれ渡して住民に読み取らせるのではなく、総合的な分かりやすいものになるよう工夫して、住民の関心を引き出してほしい。

〈企業の社会的責任（CSR）活動〉

- ・CSR活動に興味を持つ企業は増えているが、やり方やどこに相談したらいいかわからないというところが多い。今後、広報の工夫などで促進することができると思う。企業とNPOがうまく連携するには行政のサポートも必要。
- ・中小企業は地域に支えられるのだから、地域を見て活動すべき。ソーシャルマーケティングの視点からも重要。
- ・CSR活動に熱心な企業にメリットが与えられるような施策もあり得るのでは。

3 すべての市民が、安全に安心して暮らすことができる都市づくり

〈救急医療〉

- ・仙台は二次救急が手薄。強化するには、ER型の救急病院（一次から三次救急まで行えるような総合的な救急診療所）をつくり、そこに集約し、振り分けていくといった考え方がある。
- ・医療的な必要が少ないのに入院している人の適切な受け皿の確保は、救急面など病院本来の機能向上につながるので、有効な方策を考える必要がある。

〈防災〉

- ・市民も目覚めていくような啓発に力を入れてほしい。特にお年寄りや、発生確率の意味を誤解している傾向があり、防災への意識が高まりづらい。民間も取組を行い、行政・民間の両方から防災への意識を醸成するような働きかけがあってもよい。
- ・町内会長が自主防災活動のリーダーでは負担が大きすぎるので、地域に潜在している自主防災リーダーとしての適任者を選任し、育成していくことができればよい。また、活動に女性の視点を取り入れていくことが大事。
- ・阪神大震災では、歩道橋が落ちて道路交通を阻害したケースがあった。必要なものは機能を強化し、不必要なものは撤去してしまう、といった対応も求められる。
- ・地盤等ハイリスクの地域ではリスクに対応した地震の備えが必要。地震による揺れの想定を公開し、地域に応じた地震の備えを行うよう促す工夫があってもよい。
- ・災害時の医療について、コーディネート体制が脆弱に感じる。コーディネーターを戦略的に育成することが必要。
- ・実際に災害が起きたときにボランティアとの連携をいかに図るかが課題。

- ・消防団員の養成については、学生の入団や、協力事業所制度の拡充を図るなどで充実できるとよい。訓練はサラリーマン化が進んだことを反映して、土日にやってほしい。

〈安全・安心〉

- ・問題に対応するために住民やさまざまな団体、行政、警察が話し合う場があることが、いろいろな活動の基盤になり、自主性、実効性のある取組につながる。
- ・消費者被害の例や問題のある業者などを速やかに分かりやすく市民に情報提供できる仕組みを整える必要がある。中学生や高校生にも消費者問題について教える機会をもっと設けるべきである。
- ・トレーサビリティを重視し情報を公開していくことが安全安心や宮城県産の作物の信頼性につながる。

Ⅱ 地球環境時代を先導する悠久の杜の都をめざして

1 杜の都の風土を未来に継承し、自然と共生する都市づくり

〈自然環境・緑化〉

- ・泉ヶ岳少年自然の家は山の自然を体験させる唯一のふれあいの場であり、強化が必要。一般市民の呼び込みもできる施設になると良い。地域の河川について科学館や博物館とも連携して子供達に学んでもらうようにしていくと良い。
- ・地域の特徴ある自然を軸にした地域づくりは、単に環境だけでなく、地域の歴史と絡めたりしながら、地域活性化につながる取組が可能になるので、今後重視すべき。市民が水に親しむような工夫も必要。
- ・企業は環境に配慮して開発行為をするが、造成工事そのものは木を切って土地をならしてまた植えるだけというものであり本当の意味で環境に配慮したものとはなっていない。試験的に別の方法を模索し、環境ビジネス的な発想で仙台ならではの方式が確立できれば、街のアピールポイントの一つになる。
- ・都市部には街路樹や公園の緑、周辺部には森林、里山の雑木林、防風林などバリエーションに富む緑があり、それをつなぐ形で広瀬川が存在する。それぞれの良さを生かし、守ること、緑の帯でつなげること、歴史と緑を結びつけることなどが杜の都づくりになる。
- ・病院や老人施設には公園を隣接させてはどうか。「杜の都」にもつながるし、木から出てくるエネルギーは健康増進にもつながる。
- ・街中、郊外どちらの公園も、人の導線を意識した配置になっておらず、市民には使いにくい。使いやすく、行きたくなるような公園を整備すべき。広くて、オープンスペースの公園がないが、防災拠点として必要な要素。

- ・小学生など次世代への環境教育を行っていく必要があるが、父母の世代が生の自然に触れていないと感じる。インターネットで知識・情報は入るが、地域社会に落とし込むことができていない。
- ・「杜の都」は仙台の代名詞として定着しているが、実態の伴ったものとしていく取組が必要。具体的には、仙台東部の田園風景の保全、定禅寺通りや青葉通りの街路樹など。
- ・都心部の街路樹については、風を緩和する役割など気候風土をコントロールしていくという観点も必要。排気ガスがこもるといった問題もあり、自動車の流入規制、植え替え等の対策も必要。
- ・仙台には何の植物が一番向いているのか、地域ごとの植生図をつくり、本当に潤いある「緑」を選択していくことも重要。

〈景観〉

- ・「都市計画」、「地区計画」が、規制という負のイメージではなく、美しい景観という付加価値が付くというプラスのイメージを持ってもらえるような街づくりの将来ビジョンが必要である。

2 環境への負荷の少ない循環型都市づくり

〈環境負荷低減〉

- ・機能集約型都市で気になるのは、コンパクト化による環境負荷の集中。空き地、緑地を緩衝要素としてどのように入れていくか、都市計画上配慮していくことが必要。
- ・浄化槽のメタンガスを利用した発電など街区単位でその地域に合った新エネルギーを導入できると良いと思う。小さな取組を地域ごとに行っていけば、全体としてはかなりの効果があるのではないかな。
- ・夏の海風が広瀬川を遡ってくるので、風の道として利用できると天然の冷房装置として機能できる。風の通り道に配慮した都市設計ができるとよい。
- ・環境に関する市民参加のまちづくりをどう進めていくかも、立派な技術。ソフト事業について姉妹都市間で情報交換をしたり、海外にノウハウを売ったりすることも大事。
- ・ごみ分別については、ペットボトル再生はかえってコスト高になるなど問題も多い。仙台だけでなくいろいろな取組があるはずなので、情報発信し、市民と一緒に考えて取組を充実できると良い。

〈水環境〉

- ・取水した水が川に戻らずに南蒲生下水処理場に行ってしまうため、広瀬川の水量

が少ない。中流部で浄化して少しでも広瀬川に戻れると良い。雨水浸透枘などの取組はしているが市民にはメリットが分かりづらく、広報の工夫が必要。

- ・郡山堰がネックで鮎が遡上できないのは残念。魚が自然に循環できる環境が整えられると川としての魅力はより増す。

Ⅲ 地球的交流の要となる新しい中枢都市をめざして

1 仙台と東北の自立的な発展を支える高次な都市機能の集積

〈中枢性・広域連携〉

- ・仙台は東北のリーダーとしての発展が望まれるが、すべての面で仙台に集約する戦略ではなく、都市の個性や既存の都市機能を生かして、相互補完的な都市間連携を図ることが必要。
- ・東北から吸い取るだけではなく、東北のために黒子となって働くところがもっとあってよい。東北の一体感が増せば、東北の魅力も増す。
- ・仙台を経由して東北各地に行けるようなハブであるべき。港にしても、東北各地に仙台港を使ってもらおうという視点は非常に大切。仙台―新潟の機能分担は必要な視点。ブロック圏と他圏域や海外との結節機能を果たしてほしい。
- ・東北の雪や温泉を貴重な資源としてとらえるべき。東北は食糧基地に成り得るし、仙台は海外とのゲートウェイとしての役割が担えるのではないか。
- ・中枢都市として、ターゲットをはっきりさせた計画が必要。
- ・仙台は東北の中心として中心市街地を活性化するという姿勢を明確に示し、機能の集積を図るべき。
- ・メディアによる都市イメージは大きい。仙台の拠点性を強化するためにもメディアの情報発信力の強化が必要。
- ・都市交通では、市民を対象とした交通という面が強調されてきたが、仙台の都市機能を東北6県で生かしていくために市の外からの流動という面を考える必要がある。

〈交流拠点〉

- ・せっかく仙台港の位置づけが高まっているので、もっと仙台港を意識したPRや活用取組が必要。
- ・広島や小松、成田といった搭乗率が低い路線でも、東北の中枢としての拠点機能を交通面から支える大事な路線として維持すべき。
- ・東北から仙台経由で海外の都市（ホノルル）に行くルートを開発することは、東北の中での仙台の拠点性をアピールすることになる。

〈観光・交流〉

- ・市民主導のまつり、住みやすさ、夏は海水浴ができ、冬はスキーができるという魅力をもっとアピールできたら良い。
- ・仙台駅前の環境整備は急務。仙台の顔となる所が未整備では、おもてなしの心が伝わらない。東北のゲートウェイとして東北の情報が集められる機能や旅行者同士がコミュニケーションをとれる機能があっても良い。
- ・政宗や歴史といった観光客の期待を裏切らないよう、それらを見せられるような仕掛けがほしい。目に見えることで興味がわき、自分達でも仙台らしさを感じられるし、他県の方に評価されることによっても、良さを再認識できる。
- ・埋もれた資源の発掘という視点も加えて発信することにより、仙台での滞在時間（日数）を増やすことができる。歴史的資源について観光客の见たいところが見られていないのではないか。歩いて見られるまちを目指すが良い。歩いてみることで歴史も感じられる。
- ・仙台は好むと好まざるとにかかわらず交通の要所で、通る人をどう取り込むかが重要。今は連泊して楽しめる街ではない。PRも下手。
- ・プロ球団のブランドを生かしきれていない。ロゴやグッズだけでなく、駅の名前にするとか舗道をチームカラーにするとか、もっとシティセールスに結び付けたら良い。

2 世界に開かれ、国際社会に貢献する都市づくり

〈国際交流〉

- ・仙台は留学生や外国人研究者等が非常に多く、サポートもおおむね充実している。今後はこれらの人たちをどのように定着させていくか、いかに力を生かしていくかが課題。そのためには家族単位で考える必要があり、住宅問題や地域社会とのかわりが課題。また、就業の機会を確保していくことも必要。
- ・姉妹都市交流は現在イベント中心だが、相互理解、相手から学ぶという観点も考えてもよいと思う。
- ・我々にとって住み良い街を目指すべき。そうすれば、外国人は自然に寄ってくる。むしろ、偏見とか差別がないようにすることの方が大事で継続的な理解向上の取組が必要。
- ・「多文化」というのは「多言語」とイコールであり、望む言語を学べる環境が理想。

3 都市の活力と生活の豊かさを支える産業の振興

〈経済・雇用〉

- ・ 仙台は人口に依存したサービス業の街で、人がいなくなれば成り立たなくなる。ビジネスホテルが増えたのは営業所が撤退したからで、そういう意味では注意が必要。
- ・ 「支店経済」と言われるとおり、決定権の無い支店・営業所が多い。この傾向は最近さらに顕著。「下請け経済」になりつつある。
- ・ 仙台の弱みは付加価値を生み出さないこと。食産業に関しては、宮城県の企業の付加価値は新潟の2分の1にとどまる。ものを作るだけではなくそれに付随するサービスや機能も含めて販売することができていない。
- ・ 仙台の企業は下請けが多く、創造的な仕事はしてこなかった。低成長時代を迎え、下請け工場が地域から撤退や海外に流出している。大企業との関係をもう一度考え直し、自分たちでビジネスにしていかなければならない状況。
- ・ 経営層の人材が不足している。経営の基礎的知識が決定的に欠如している企業が多い。企画力も不足している。知財や権利化が弱い。そこそこ食べていければいいという感覚があり、成長しない。営業も戦略的ではなく、場当たりの傾向が強い。
- ・ 企業人はビジネス情報のあるところに魅力を感じる。製造業に関して、仙台は情報量が圧倒的に少ない。インターネットの時代でも、face to face の肌を感じる情報は極めて重要。また、教育環境は企業立地にとっては重要。
- ・ 経済活動は市境を越えたもの。市域かどうかではなく、広域仙台として広く施策を展開してほしい。また、産業政策は、一度決めたら変えないという姿勢ではなく、状況によって臨機応変に対応してほしい。
- ・ 日本は労働生産性で、アジアで競争していくことは不可能。国内のレベルの高い消費者と対話し、商品を育てていくような取組が求められる。
- ・ 大学卒業者の就職先がない。卒業生が就職し、優秀な研究者がまた大学に戻って研究を続ける。こうしたサイクルを仙台につくる必要がある。

〈新産業・産学連携〉

- ・ 食材を使って食材でないものを作る非食産業に、他県では動いているが、宮城県は動きがない。このように失っているビジネスチャンスを生かす観点が求められる。
- ・ 今後、世界的に伸びる産業として健康福祉産業が考えられる。産業振興のアイデアはいろいろ出てくると思う。

〈農業・食産業〉

- ・ 宮城県は、水産業と農林業の生産高に比べ、食品産業の産業規模が小さい。流通、

外食産業についてほとんど県外に任せている。仙台市から変えていく取組が必要。

- ・ 仙台は生産者と消費者が存在しており、高いポテンシャルがある。お互いのニーズを結びつけることが大事。地産地消はマージンもなく、リードタイムも短いので安くて新鮮なものを届けられる。コミュニティビジネスとして地域でお金が回る仕組みをもっと拡充して地域で経済をまわしていくと良い。
- ・ グリーンツーリズムなど農業とその周辺にあるものを組み合わせたクロスファンクショナルな取組も考えていくべき。
- ・ 農地は、安全な農産物の供給を始め、潤いある緑の生活環境、防災機能に貢献している。土地を有効に活用するために株式会社が農業に参入することは構わないが、その後転売されたり、産廃処理場にされたりすることは規制していくべき。

4 高次な都市機能が連携する都市構造の形成と計画的な市街地整備の推進

〈都心〉

- ・ 環境にやさしいまちづくりと高層ビルの建設との整合性について、民間任せにしておかず、ルールの中で都市計画を進めていくべき。それなしには、マンション、オフィスビルの供給過剰により将来的に街が荒れてしまう。
- ・ 仙台駅前が粗末。降り立ったときのイメージが大事。駅前には市としての風格を表現する機能がある。
- ・ 中心部の価格が高過ぎ、居住に結びつかない。この課題を解消しつつ、杜の都をどのように演出していくのがテーマ。長町については、オフィス主体の当初の計画から居住系とオフィス均等の開発に修正をした。今までと違う居住モデルを作らなければならない。現在の商店街とつながって機能の集積をできると良い。

〈郊外〉

- ・ 仙台の場合、1990年代まではインフラ整備を含む郊外団地整備が進んだ。市内中心部についても、インフラの更新と新旧市街地をつなぐ道路の整備を進めてきた。2010年～2020年にかけては、これらインフラの老朽化に警戒が必要だと思う。それを見越した上でのまちなか居住の推進といった考え方はあり得る。
- ・ 郊外で低密度に拡散した市街地を、バスなど公共交通が無尽蔵に面倒を見るわけには行かない。都心へ誘導するという事だと思うが、郊外の所有地が売れないと都心に出てくることはできない。次善の策として、車で生活する若い人達を郊外の団地へ誘導するというのが考えられる。
- ・ コンパクトシティを進めようとしているが、そのゾーンに行かないと用が足せないような行き過ぎたゾーニングはよくない。それよりも小さなまとまりのコミュニティ単位のコンパクトタウンで生活できることが重要。

5 多様な都市活動を支える総合交通体系の形成

〈公共交通〉

- ・仙台21プランと、その後のアクセス30分構想については、市内どこでも30分で都心部へのアクセス可能なための環境を市が整備するという印象を与え、郊外への市街地拡張を招いたというマイナスの印象がある。
- ・今後の仙台市を考えた場合、丘陵地の団地問題は深刻。特に移動手段は大きな問題となるだろう。大学の技術を活用した交通システムの構築ができないか。
- ・公共交通を支えていくのが事業者だけ良いのか、市民が支えていく取組があっても良い。

〈自動車〉

- ・「杜の都」というイメージにとって、交通の部分は大きなネックになるのではないか。仙台は中心部とそれ以外の地域が割に明確に線引きができるので、流入規制とか政策誘導の余地があるように思う。
- ・渋滞対策などは、東京などと比較すると現在でも影響は低度であり、今後人口は減少することを考えると、抜本的に行わなければならないほどではない。市内中心部に入る都市計画道路を少し手直しすれば大体問題は解消する。

〈自転車〉

- ・仙台はある意味自転車に向いている環境だと思うので、自転車を使いやすい街にしてほしい。駅前の自転車駐車無料システムは良い。地下鉄に自転車が乗れるようにするとか、道路整備だけでなくソフト面の工夫があっても良い。マナーの充実も必要。

〈交通需要管理〉

- ・施策と市民のニーズがうまくかみ合っていない。ある程度コントロールすべきで、公共交通へのシフトの鍵は、どのようにコスト面で公共交通にメリットを生み出していくか。値段とニーズの分析が大事で、交通需要マネジメント（TDM）はマーケティングをしっかりとすれば成功する。

IV 未来を創造する世界の学都をめざして

1 高度な研究機能や情報機能の集積による、未来を創造する知識情報社会の形成

〈学都〉

- ・大学がそろっている環境を生かし、大学の研究機関と連携し、モデル事業として先進的取組を逆に発信できるようにならないか。
- ・大学との連携、大学同士の連携は、橋渡し役がいればもっと進む。コンソーシアムがつなぐ役割を果たせると良い。

- ・東北大学があることは、研究開発型企業を誘致する上では強み。生活環境としても、コンパクトにまとまっていて住みやすいことも強み。優秀な外国人研究者を招聘するには小中高で一定のレベルをもつ学校やインターナショナルスクールが必要。

〈情報化〉

- ・お年寄りにとっても、使いやすく分かりやすい行政サービスの情報化を進めるべき。インターネットとパソコンを使いこなせるようにということではなく、情報化のメリットをもっと感じられるやり方があるはず。
- ・情報提供については、すべて電子化すればよいというものでもなく、媒体の使い分けも重要。即時性は不要だが特に伝えたい情報は紙で提供するなど。
- ・行政は、市民同士や企業からの情報発信が進むような旗振り役となることも重要。経済界は競争が原則ではあるが、IT化に取り残されることにより名産品や文化が消えてしまわないよう、情報化を支援するというのも行政の役割。
- ・行政としては、情報弱者への支援を残しておくことは必要だが、そこを重点化する必要はないと思う。
- ・子供達のインターネット安全教室は、倫理面の指導も含め、絶対に必要。大人にも必要であり、社会全体で取り組むべき課題。情報が溢れる中で、自分に必要なものをどう取捨選択して取り入れるかということも課題。身近な問題として意識されるような情報提供、啓発が必要。

2 創造力と心の豊かさをはぐくみ、自己実現ができる生涯学習社会の形成

〈学校教育〉

- ・子供には予想外の可能性があり、活躍できるきっかけさえ与えてあげれば、きちんとやり遂げる。子供の可能性を引き出せるような環境づくりをしてほしい。
- ・障害児教育では、分離教育をすべて否定するのではなく、特別支援学校や特別支援学級等で培われたノウハウを通常教育に生かしていくことが重要。
- ・発達障害児が増加しているのに対し、マンパワーは不足している。その解決策として、学生ボランティアの活用や、地域住民にもっと学校に入り込んでもらうことを考えてよい。簡単な研修を行い参加してもらうことで、地域の人に障害児を理解してもらえ、社会に対して啓蒙する機会になる。

〈生涯学習〉

- ・行政が提供するさまざまな学習の機会や支援、指導者等について、ワンストップで情報を得られるとよい。そのような情報提供体制を整えることは、行政が市民に何を期待するかというメッセージにもなる。
- ・地域の人がもっと学校（施設、先生）を使うようになるとよい。空き教室活用だ

けでなく、そういう場を積極的につくるべき。学校が地域開放を理解することも必要。

- ・市民センターという、自ら学ぼうとする人が集まる場があることは強み。学びのつながりをうまく活用して、地域課題解決の活動を広められれば良い。
- ・行政から提供するだけでなく、市民センターに集まった市民の活動や人材の情報を行政に還元するような取組もあって良い。

3 世界性を持つ都市の個性をはぐくむ豊かな都市文化の創造

〈芸術・文化〉

- ・仙台には、プロスポーツの選手や個性的な文化人がたくさんいる。そのような人たちが普通にまちの中にいて、自分を表現できているというような「カッコイイまち」をめざしてほしい。
- ・仙台は音楽の街と言われるが、お金を払って聴くという感覚がない。良い音楽というだけではなく、プラスαがないとお金を落としえもらえない。文化にもお金がまわるようになると良い。

〈スポーツ〉

- ・子供の体育環境は良くなっていない。部活動は減少傾向で、地域で運動を行う受け皿がない。
- ・市民利用施設予約システムにより、施設利用の利便性は大きく向上しているが、スポーツをする団体などの情報の提供が不足している。
- ・スポーツは「まね」が基本。プロスポーツ団体が生まれるなど、良いスポーツを見てまねができる環境が整ってきた。国際的なスポーツ大会をいずれ、ユースではなく、もっと上のレベルで開催できるようになると良い。
- ・プロスポーツの存在は、地域や地元商店街などに彩りを与えた。何かをしようというきっかけになった。プロスポーツは都市のコンテンツとして必要。「プロだから自立」ではなく、そういう市民の意識に合わせた支援をしてほしい。

〈歴史・情緒〉

- ・「杜の都」の原風景を市域全体に復元することはできないが、それにふれられる空間をつくってはどうか。残された居久根を文化財として残す努力も求められる。
- ・古い建物をきちんと使いながら生かしていく仕組みが必要。歴史的建造物はどんどん無くなっている。すべてを守れとは言わないが、仙台ぐらい（歴史的建造物が）無くなっていれば、論を待たずに守っても良いくらいである。
- ・自分とその周りの土地をきちんと管理することが自分の幸せにつながるという直感でコミュニティが維持されてきた。こういう小さなコミュニティを大事にすべき。守るべき街並みや建物があることで、人が守り支えようという気持ちも育つ。

- ・地形の素晴らしさ、川と水路網をもっと生かしてほしい。川のそばで遊んだり、生活水路などを探したりすることで、土地の記憶や人の営みを感じることができる。
- ・先人のメッセージを市民にどう伝えていくかを考えて施策を進めるべき。遺跡の発掘など、市民に公開する日を設けているが、大学との連携で学術的な価値を顕在化することにより、もっと広がりを持たせられる。

〈都市個性〉

- ・定禅寺通は良い使われ方をしていると思う。オープンカフェ、ジャズフェスなど市民が楽しめるイベントが多く開催されている。広瀬川までの導線がうまくつながれば、もっと良い空間になる。
- ・市民にとっての将来像は「杜の都」という形で共有されているとは思いますが、何が一番大事かということ共有しているかという疑問。仙台の良い点としての「杜の都」のカラーが薄れ、「リトル東京」を目指しているように見える。
- ・素材はそろっていながら、コーディネートされておらず、利点を生かしきれていない。トータルな視点でのコーディネートは魅力あるまちづくりには重要な視点。
- ・市の底力をつくるのは、アイデンティティをどうつくるかということ。最後は個人一人一人の力が重要で、「個」を強くすることで全体が強くなる。これからは「個」が育たないと都市としての存在意義が保てない。そのためにも、市民に語りかけてほしい。

V 都市経営

1 主体的・創造的な都市経営の推進

- ・相談に来た市民にワンストップ的に対応できるところがあると良い。横の連携や民間やNPOの相談窓口の情報共有も必要である。
- ・行政の縦割りでなく、各施設を使えるようになると良い。資源を共有することで、それぞれの施設の厚みが増し、市民サービスが向上する。

2 市民と行政の協働によるまちづくりの推進

- ・職員が現場の状況を知り、市民の声をしっかり聴くことができるような体制づくりが求められる。このようなことを地道に続けていくことが市政への信頼、施策の充実につながっていく。行政と市民が役割分担を図っていく上でも、まちづくりや福祉など様々な分野で市民の意見を取り入れた行政というのが大事になると思う。施策に市民がかかわったと思える仕組みがあると良い。
- ・協働によるまちづくりは重要だが、協働は目的ではなく手段である。そこを取り違えないように注意が必要。行政は、環境や制度・しくみをつくる、あるいは行政自らがコーディネーターになるなどの役割を果たすことが必要である。

- ・仙台では、NPOと協働してプランを作る場合、一つのNPOしか対象とならない。NPOはそのときに応じて柔軟にミッションを組むので、行政でも柔軟性があると良い。

3 効率的な行財政運営の推進

- ・役所はできることに限界があるとはっきり言ってはどうか。その限界の中で役割をお互いに考えていくことで理解につながり、活動がより円滑に進む。
- ・指定管理者制度の導入が進んだが、役所はNPOをコスト削減のための安い下請け先と見ているのではないか。